



岩波文庫

32-033-1

中國名詩選

(上)

松枝茂夫編

岩波書店

中国名詩選(上) [全3冊]

1983年9月16日 第1刷発行 ©
1985年3月20日 第3刷発行

定価 550 円

編 者 まつ えだ しげ お
 松 枝 茂 夫

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株 式 岩 波 書 店
 会 社

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

岩波文庫

32-033-1

中國名詩選

(上)

松枝茂夫編



岩波書店

凡例

一、中国の詩歌は『詩経』以来今日まで、およそ三千年におよぶ豪華絢爛たる歴史をもつています。それは質においても量においても世界に冠たるものといつてよいでしょう。

一、この書はそのなかから最もすぐれた愛誦するに足る作品を選んで、これに簡単な訳注を添えたものです。

一、作品は時代順・作家別に排列し、それぞれの作家の略伝を付しました。時代順・作家別とはいつても、たとえば『詩経』とか漢代歌謡などのように、作者の名も制作年代もわからないものは、信頼すべきテキストの順に扱いました。

一、詩の選択に当たっては、あまり長篇のものや、初学者に難解なものは原則として割愛しました。それでもどうしても避けて通れないものは、やむをえず部分的に抄出しました。

一、訳注はなるべく初学者に理解しやすいように平易なことばを使用し、専門的な用語は出来るだけ避けようと心がけました。また詩の解釈については日本・中国の信頼すべき注釈書を参考にして多大の裨益を受けました。一々その旨をしるしてみだりにその美をかすめた無礼を謝すべきですが、この本の性質上、敢えて省かせていただきました。

一、本書は三分冊とし、上巻は『詩経』から漢魏の時代まで、中巻は陶淵明から李白・杜甫の

時代まで、下巻は白居易から近代までとします。全部でおよそ五百首ほどの詩篇が収められるはずです。天上の星の数ほどもあるなかから、僅かこれだけを選びだすということは、到底人間わざで出来ることではありません。非力をかえりみず、敢えてここに蛮勇の大ナタをふるった次第であります。

一、訳注の仕事に協力したのは、安藤陽子、市川宏、大石智良、奥平卓、久米旺生、竹内良雄、立間祥介、丸山松幸、山谷弘之、和田武司、その他の諸君です。しかし最終的には松枝に一切の責任があります。

目

次

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

凡例

解説

古代北方の歌謡——『詩経』

關雎 <small>かんしよ</small>	………	〔周南〕	二六
桃夭 <small>とうよう</small>	………	〔周南〕	二六
芣苢 <small>ふい</small>	………	〔周南〕	三〇
野有死麋 <small>やゆうしきん</small>	………	〔召南〕	三三
燕燕 <small>えんえん</small>	………	〔邶風〕	三四
靜女 <small>せいじよ</small>	………	〔邶風〕	三六
柏舟 <small>はくしゆう</small>	………	〔鄘風〕	四〇
氓 <small>ぼう</small>	………	〔衛風〕	四三
伯兮 <small>はくけい</small>	………	〔衛風〕	四九
黍離 <small>しより</small>	………	〔王風〕	五一
君子于役 <small>くんしゆうえき</small>	………	〔王風〕	五一
遵大路 <small>じゆんたいろ</small>	………	〔鄭風〕	五七
女曰雞鳴 <small>じよえつけいめい</small>	………	〔鄭風〕	五八
蕩兮 <small>たくけい</small>	………	〔鄭風〕	六一
狡童 <small>こうどう</small>	………	〔鄭風〕	六一
褰裳 <small>けんしやう</small>	………	〔鄭風〕	六三

風雨ふうう……………〔鄭風〕 五

子衿しきん……………〔鄭風〕 六

溱洧しんがい……………〔鄭風〕 六

出其東門しゅつぎとうもん……………〔鄭風〕 七

雞鳴けいめい……………〔齊風〕 七

陟岵しやくこ……………〔魏風〕 七

伐檀ばつたん……………〔魏風〕 六

碩鼠せきそ……………〔魏風〕 八

東門之楊とうもんしやう……………〔陳風〕 八

澤陂たくひ……………〔陳風〕 八

蒹葭けんか……………〔秦風〕 八

無衣ぶい……………〔秦風〕 九

七月しちがつ〔節録〕……………〔邶風〕 九

采芣さいふ〔節録〕……………〔小雅〕 九

蓼莪りくが……………〔小雅〕 九

生民せいみん……………〔大雅〕 一〇

豐年ほうねん……………〔周頌〕 一〇

古代南方の歌謡——『楚辭』……………一一

離騷〔節録〕……………屈原 一二

山鬼さんき……………屈原 一三

湘夫人〔節録〕……………屈原 一四

國殤こくしょう……………屈原 一四

天問〔節録〕……………屈原 一三七

橘頌〔節録〕……………屈原 一三三

漁父……………屈原 一三四

九辯〔節録〕……………宋玉 一三九

漢代の歌謡……………一四三

垓下歌〔垓下の歌〕……………項羽 一四四

大風歌〔大風の歌〕……………漢高祖 一四五

秋風辭〔秋風の辞〕……………漢武帝 一四六

歌……………李延年 一四八

悲愁歌〔悲愁の歌〕……………烏孫公主 一四九

戰城南〔城南に戦う〕……………無名氏 一五〇

有所思〔思ふ所有り〕……………無名氏 一五三

上邪〔上や〕……………無名氏 一五五

江南……………無名氏 一五七

薤露……………無名氏 一五六

蒿里……………無名氏 一五九

烏生……………無名氏 一六〇

陌上桑……………無名氏 一六四

相逢行……………無名氏 一七〇

西門行……………無名氏 一七四

東門行……………無名氏 一七七

飲馬長城窟行……………無名氏 一七九

婦病行……………無名氏 一八三

孤兒行……………無名氏 一八五

泣く……………無名氏 一九七

豔歌何嘗行……………無名氏 一九二

羽林郎……………辛延年 一九六

豔歌行……………無名氏 一九四

董嬌饒……………宋子侯 二〇二

悲歌……………無名氏 一九六

孔雀東南飛(孔雀東南に飛ぶ)……………無名氏 二〇六

枯魚過河泣(枯魚河を過りて

漢代の詩……………二四九

四愁詩(四愁の詩)……………張衡 二五〇

驅車上東門(車を上東門に驅る)……………無名氏 二六三

行行重行行(行きて重ねて

去者日以疎(去る者は日に以て

行き行く)……………無名氏 二五四

疎し)……………無名氏 二六四

青青河畔草(青青たる河畔の草)……………無名氏 二五六

生年不滿百(生年は百に満たず)……………無名氏 二六六

冉冉孤生竹(冉冉たる孤生の竹)……………無名氏 二五六

客從遠方來(客遠方より来る)……………無名氏 二六七

迢迢牽牛星(迢迢たる牽牛星)……………無名氏 二六〇

明月何皎皎(明月何ぞ皎皎たる)……………無名氏 二六九

上山采藤蕪(山に上りて藤蕪を采る).....無名氏 二七〇

十五從軍征(十五にして軍に從いて征く).....無名氏 二七二

三国時代魏の詩.....二七五

短歌行.....曹操 二七六

美女篇.....曹植 三〇二

苦寒行.....曹操 二八〇

吁嗟篇.....曹植 三〇五

雜詩.....曹丕 二八四

野田黃雀行.....曹植 三〇九

燕歌行.....曹丕 二八六

七哀詩(七哀の詩).....王粲 三〇〇

送應氏(應氏を送る).....曹植 二八八

飲馬長城窟行.....陳琳 三二三

七哀詩(七哀の詩).....曹植 二九一

贈從弟(從弟に贈る).....劉楨 三二八

雜詩.....曹植 二九三

駕出北郭門行.....阮瑀 三二九

白馬篇.....曹植 二九五

室思.....徐幹 三三三

名都篇.....曹植 二九六

悲憤詩(悲憤の詩).....蔡琰 三三四

詠懷 其一	阮籍 三六
其六	阮籍 三九
其三十三	阮籍 四二
贈秀才入軍(秀才の軍に入る に贈る)	嵇康 四三

解 説

上巻には『詩経』から、五言詩型の確立した漢魏時代までの詩歌を収める。

古代北方の歌謡——『詩経』

中国の詩の歴史は『詩経』にはじまる。それはとりも直さず中国文学史の開幕でもあった。では『詩経』以前に中国に詩歌はなかったのだろうか。むろんそんなはずはない。人間、言葉がある以上、うれしいとき悲しいとき、これを声に出して歌わずにいられようか。詩歌はむろんあったろうが、記録されることがなかったのである。今日『詩経』以前の詩歌と称するものが古書のなかに散見する。三十首ほどもあろうか。たとえば堯ぎょうの時、ある老人が歌ったという『擊壤げきじょう』の歌とか、舜しゆんの時の『卿雲けいうん』の歌とか、箕子きしの『麦秋ばくしゅう』の歌とか。しかしそれらはすべて後世の偽作であって信ずるに足りない。

『詩経』は中国最古の詩歌全集である。後に儒家の經典のひとつとなったため『詩経』と呼ばれるようになったが、もとは単に『詩』といった。現存するものは三〇五篇である。

『論語』のなかに、孔子は、

詩三百、一言にしてこれを蔽えば、曰く、思い邪なし。

といっている。つまり孔子の時代にもその詩の数は今日とほぼ同じ三百篇であったのだろう。

これはすべて周代のもので、紀元前十一世紀、周朝がまだ盛んであった時代から、前八世紀、東周の衰世に至る、およそ三、四百年間の作品である。

『詩経』の詩は次のように分類されている。

一、風 一六〇篇

周南、召南、邶風、鄘風、衛風、王風、鄭風、齊風、魏風、唐風、秦風、陳風、檜風、曹風、豳風。

二、雅 一〇五篇

小雅、大雅。

三、頌 四〇篇

周頌、魯頌、商頌。

風は国風ともいう。十五国の民謡の意である。ただしこれは必ずしも全部が国の名ではない。このなかの周南・召南は周の南方一帯であり、邶・鄘は衛国の一部の地名であり、王は東周の王都付近を指したものである。大体今の河南省を中心として、山東・山西・陝西・甘粛の諸省に及ぶ。つまり、北方の黄河流域地方で、それが周王朝の勢力範囲でもあったわけである。

民謡の常として作者はむろんわからない。そして大部分は短篇で、くり返しが多く、単純素朴である。しかしなかには修辭的にすでにかなり高度の洗練を経たものも少なくない。恋の歌が過半数を占め、そのほかに農事を歌ったもの、結婚を祝ったもの、人民の生活の苦しさを訴えて、為政者の圧迫をのろった歌もある。総じて北方黄土層地帯の農民の喜びや悲しみをさながらに吐露したものである。

雅は周王朝の宮廷の宴会で演奏された樂章である。これに大小の別があり、それは用いられる樂器の数による區別だともいわれている。概していえば、小雅には国風に似た民謡風な歌の文句が多く取り入れられている。大雅はそれに比べるとはるかに長篇で、莊重謹嚴な歌が多い。なかには堂々と自分の名前を詠みこんで君主を諷諫したものもある。周朝の先祖の歴史を歌った叙事詩が特に珍しい。

頌は先祖の廟びやうの祭りのときの樂章である。これは歌と音樂のほかには舞蹈をも伴ったものであろう。一般に短篇である。周頌は周王朝の、魯頌は魯国のそれであり、また商頌は周に亡ぼされた殷商の遺民の祭歌であるという。

『詩經』の詩形は毎句四字、すなわち四言しごんを基本とする。この四言詩は最も素朴でかつ莊重な詩形として、後世も長く踏襲された。